

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 スケトウダラ

学名 *Gadus chalcogrammus*

系群名 太平洋系群

北海道区水産研究所

中央水産研究所

担当水研 東北区水産研究所

開発調査センター



生物学的特性

寿命： 不明（10歳以上）

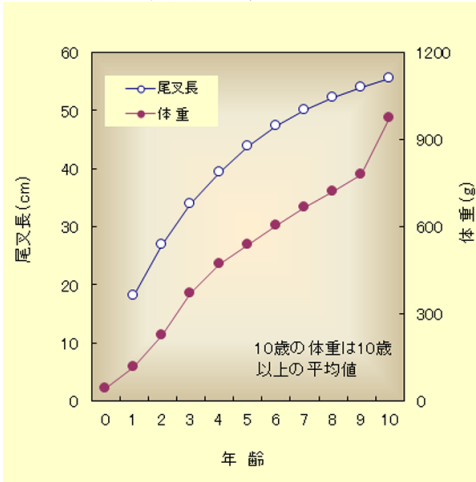
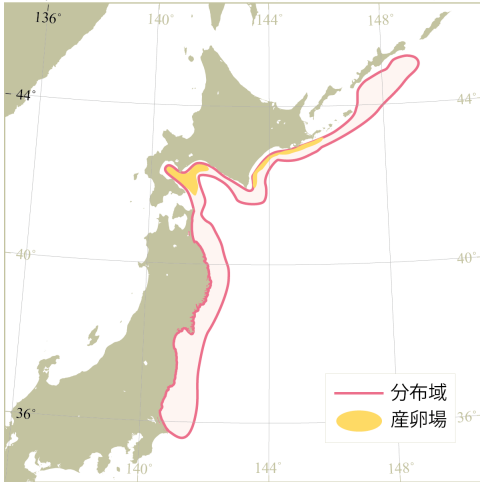
成熟開始年齢： 3歳（20%）、4歳（80%）、5歳（90%）、6歳（100%）

産卵期・産卵場： 12～翌年3月、盛期は1～2月、主に噴火湾周辺海域

食性： 主にオキアミ類や橈脚類をはじめとする浮遊性甲殻類、その他に小型魚類、イカ

類、底生甲殻類、環形動物など

捕食者： マダラ、アブラガレイ、イトヒキダラ、海獣類、共食い

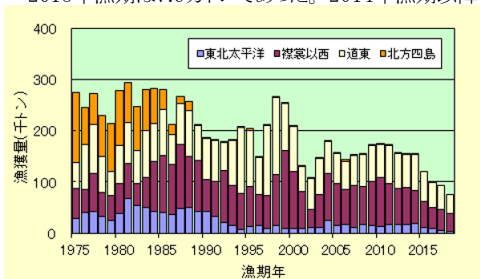


漁業の特徴

本系群は、沖合底びき網漁業（沖底）と刺網や定置網などの沿岸漁業で漁獲されている。1980年代には東北太平洋での漁獲量が多かったが、近年の主漁場は北海道の渡島・胆振地方（襟裳以西）と十勝・釧路地方（道東）である。襟裳以西では沿岸漁業が主体で、主漁期は10～翌年1月である。道東では沖底が主体で、主漁期は9～11月である。なお、千島列島南西海域ではロシアの大型トロール船が操業を行っている。

漁獲の動向

漁獲量は2000年代前半に20万トン台から急減し、2002年漁期（4～翌3月）には10.9万トンまで減少した。2005～2014年漁期はTAC規制なども働き14.3万～17.5万トンの範囲で推移したが、2015年漁期以降は減少傾向となり、2018年漁期は7.6万トンであった。2014年漁期以降、道東の漁獲量が襟裳以西を上回っている。

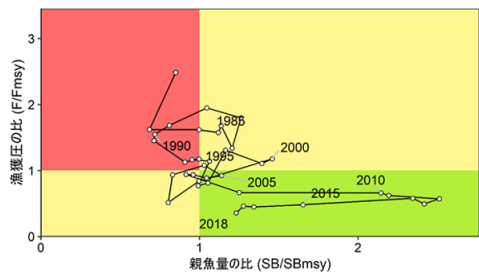
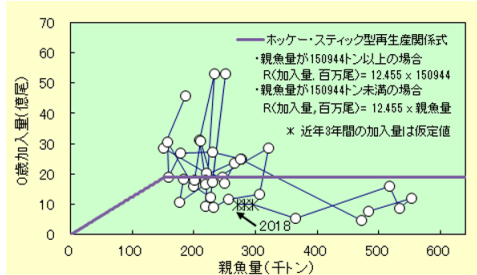
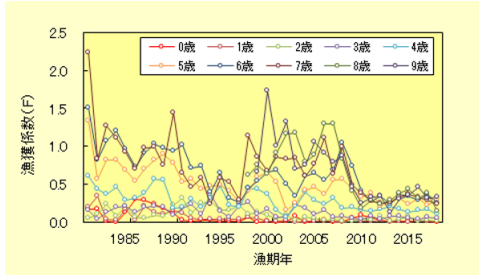
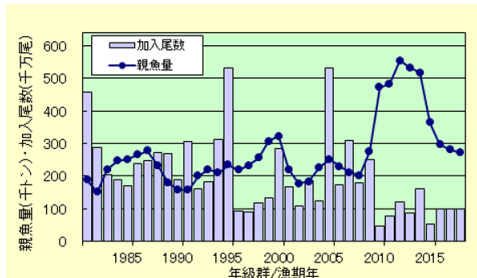
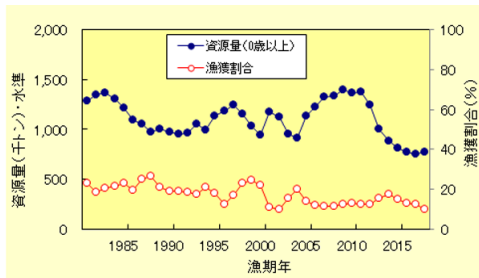


資源評価法

コホート解析により1981～2018年漁期の資源量を推定した。北海道根拠の沖底の標準化した年齢別単位努力量当たり漁獲量(CPUE) (3～7歳)と、沿岸漁業のCPUE(刺網漁業の漁獲成績報告書から得られる月別CPUEの合算値、および同漁業の操業日誌に基づく標準化CPUE)の変動と、それぞれのCPUEに対応する資源量の変動が合うように年齢別漁獲係数(F)を推定した。Fの推定の安定化のためリッジVPAの手法を用いた。

資源状態

資源量(0歳以上)は2012年漁期以降に減少に転じ、2018年漁期は77.5万トンであった。親魚量は2010～2012年漁期に急増したが、その後は減少し2018年漁期には27.1万トンであった。加入量には、2008年以降卓越年級群の発生がみられず、2009年級を除き比較的低い状況が続いている。漁獲圧(漁獲係数:F)は、2010年漁期以降は6歳以上の高齢魚でも低い値で安定して推移している。再生産関係にはホッケ・スティック型を適用して算出した最大持続生産量(MSY)は17.6万トンである。MSYを実現する親魚量(SBmsy: 22万トン)に対する2018年漁期の親魚量の比は1.23であり、2018年漁期の親魚量はSBmsyを上回っている(SB2018/SBmsy=1.23)。MSYを実現する漁獲圧(Fmsy)に対する2018年漁期のFの比は0.36であり、2018年漁期のFはFmsyを下回っている(F2018/Fmsy=0.36)。親魚量の動向は近年5年間(2014～2018年漁期)の推移から減少と判断される。



資源評価のまとめ

- 2018年漁期の資源量(0歳以上)は77.5万トン、親魚量は27.1万トンと推定された
- 2018年漁期の親魚量はSBmsy(22.0万トン)を上回る(SB2018/SBmsy=1.23)
- 2018年漁期のFはFmsyを下回る(F2018/Fmsy=0.36)
- 親魚量の動向は近年5年間(2014～2018年漁期)の推移から「減少」と判断される
- 2008年級以降は卓越年級群の発生が観察されず、2009年級を除き比較的低い加入量が続き、資源量・親魚量ともに減少傾向にある

執筆者: 境 磨・山下夕帆・千村昌之・石野光弘・成松庸二・貞安一廣

上記の再生産関係はMSYを実現する親魚量および漁獲圧を算出するため、研究機関会議での検討を踏まえて提案したものである。

資源評価は毎年更新されます。